看護における哲学的プラグマティズムの意義：

立場の異なるプラグマティストの比較から

名古屋大学大学院医学系研究科

眞　弓　尚　也

2022年度学位申請論文

看護における哲学的プラグマティズムの意義：
立場の異なるプラグマティストの比較から

名古屋大学大学院医学系研究科

眞　弓　尚　也

要旨

プラグマティズムは、内省的な思索よりも現実的な結果や経験的な説明を重視する。しかし、本稿で紹介する四人の著名なプラグマティストが示すように、プラグマティストの議論は一様ではない。彼らの大きな違いは、パースとハークが客観的真理を認めているのに対し、ジェームズとローティが認めていないことである。したがって、知識に関するプラグマティストの見方をより深く理解するためには、両方のグループを比較・参照する必要がある。看護の分野でもプラグマティズムが哲学的指針として言及されることがあるが、プラグマティストとしての影響力は、パースやハークよりもジェームズやローティが大きく、このような一面的な理解は、看護研究者にプラグマティズムの偏った理解をもたらす危険性がある。一方、四人のプラグマティストは、我々の知識の探求の前に知識の本質を規定するものとしての形而上学を否定し、経験と実践を重視する自然主義を共有している。このようなプラグマティックな自然主義的な立場は、看護理論が臨床実践から逸脱することのないようにするのに役立つ。また本稿では、ミックスメソッド研究、認識論的相対主義、実在論など看護における哲学的な問題に対する、四人のプラグマティストの考えの適用についても検討している。本稿は、プラグマティズムがこれらの各テーマに新たな視点を与える可能性について示すことにより、プラグマティズムへの異なるアプローチが看護師や看護研究者に今後さらなる発想や視点を与えられることを示すものである。

Abstract

Pragmatism emphasizes practical consequences and empirical explanations rather than introspective contemplations. However, the arguments of pragmatists are not uniform, as shown by the four prominent pragmatists presented in this article. The major difference between them is that Peirce and Haack acknowledge an objective truth, whereas James and Rorty do not. Thus, for a fuller understanding of the pragmatist view of our knowledge, both camps must be consulted. In the nursing field, pragmatism is occasionally referred to as a guiding philosophy. However, the influence of James and Rorty has been greater than that of Peirce and Haack on pragmatists, which may risk leading to a skewed understanding of pragmatism by nursing scholars. Still, the four pragmatists share naturalism, which rejects a metaphysics that defines the nature of knowledge before our inquiry and emphasizes experience and practice. Pragmatic naturalism can help ensure that nursing theory does not deviate from clinical practice. This article also explores the broad adaptability of the ideas of all four pragmatists to philosophical issues in nursing, such as mixed-methods research, epistemic relativism, and realism. By showing that pragmatism can be relevant and stimulating to each of these topics, the article demonstrates that the different approaches to pragmatism can provide more inspiration for nurses and nursing researchers in the future.

＜目次＞

１．はじめに 1

２．著名な四人のプラグマティスト 2

２－１．チャールズ・S・パース 2

２－２．ウィリアム・ジェームズ 4

２－３．リチャード・ローティ 4

２－４．スーザン・ハーク 5

２－５．まとめ 6

３．プラグマティズムにおける客観性 7

４．ハークの優れたエビデンス 10

５．認識論的相対主義 12

６．看護における実在論 14

７．クリティカル・リアリズム 15

８．ミックスメソッド研究 17

９．研究の限界 19

１０．結論 19

文献 22

１．はじめに

プラグマティズムは、19 世紀末にチャールズ・S・パースによって創始された比較的新しい哲学の伝統である。日常的に使われるプラグマティックな姿勢とは、大まかに言えば、思想や主義にとらわれず、現実的な利益を追求する姿勢を意味する。一方、哲学的プラグマティズムは、他の哲学的伝統と同様、知識の本質や倫理的要求といった問題を扱っている。しかし、哲学的プラグマティズムを一つの統一された思想体系として考えることは、理解の妨げになる。この点バーンスタインは、哲学的な立場や方向性を「〜イズム」として一括りにすることの危険性を指摘している（Bernstein, 2010; pp. 1-5）。なぜなら、これらの「イズム」の代表者たちが主張する立場を綿密に検討すると、大きな相違点や、さらには矛盾する主張さえ見受けられるからである。彼は、このことが特にプラグマティズムに現れていることを見出している。本稿では、プラグマティズムの立場の多様性と共通性に注目し、その多様性が看護にどのように関わるかを検討する。

後述するように、看護学の文献にはプラグマティズムに対する肯定的な見解と否定的な見解が見受けられる。実際、プラグマティズムは看護学の研究パラダイムとして「不明確」（Corry et al., 2019）あるいは「未発達」（Allmark & Machaczek, 2018）とされることがある。プラグマティズムがこうした見方をされる大きな理由の一つは、その思想家たちの意見の多様性である。むしろ、プラグマティズムはその多様性ゆえに、看護の様々な分野に適用できる可能性が高いと筆者らは考えている。20 世紀半ばには、科学で使用される用語の意味を分析することを特徴とする論理実証主義[1]が台頭し（Bacon, 2012; p.7）、プラグマティズムは時代遅れであるとされるに至った。しかし、プラグマティズムは、真理の本質や知識の正当化など、近年議論されている問題を先取りしていたと認められ、広く関心を集めている（Bernstein, 2010; pp. 26-31; Misak, 2013; pp. 1-4, 246-247）。さらに、プラグマティズム内の意見の相違は、プラグマティズム内の活発な議論を反映しているため、看護哲学の議論に貴重な示唆を与える可能性がある。

以上の点を明らかにするために、本稿では四人の著名なプラグマティストを取り上げ、彼らの共通点と多様性を説明し（ただし、プラグマティズムの概要を説明するこ

[1] 論理実証主義の基本方針は、科学における命題は経験的に検証可能でなければならない、というものであるが、この方針は現実的には維持するのが困難であることが徐々に明らかにされ、1950 年代の終わり頃より勢いを失った（Risjord, 2011; pp. 84-90）。

とは意図しておらず、それは本稿の範囲をはるかに超えている）、次に彼らの考えが看護の問題とどう関係しているかを示すことにする。

２．著名な四人のプラグマティスト

哲学的プラグマティズムは、1870 年頃、アメリカのマサチューセッツ州ケンブリッジで、ウィリアム・ジェームズ、チャールズ・S・パース、チョーンシー・ライトなどが所属していた読書会「形而上学クラブ」で生まれた（Misak, 2013; p. ix）。それ以来、プラグマティズムは多くの哲学者によって展開されてきた。本稿では、「古典的プラグマティスト」と呼ばれるパースとジェームズ、そして現代的プラグマティストとしてローティとハークを取り上げることにする。ミサックは、プラグマティストを大別して、真理や客観性はどこにもないと主張する人々と、物事を正しく理解する希望を持ち、プラグマティズムは真理について説明を提示できると主張する人々の二つに分けることができるとする（Misak, 2013; p. 3）。前者にとって真理は、あるとしても共同体や個人に相対的なものであり、後者にとって真理は客観的な探求によって近づくことができるものである。前者にはジェームズやローティが、後者にはパースやハークが含まれる。本稿では、この二つのグループの間の論争に焦点を当てる。

２−１．チャールズ・Ｓ・パース

プラグマティズムは、デカルト[2]によって 17 世紀に始められた哲学の伝統であるデカルト主義に対する徹底的な批判から始まる（Bernstein, 2010; p. ix）。パースは、「哲学は普遍的な疑いから始めなければならない」、「私がはっきりと確信していることは、すべて真実である」といったデカルト主義の中心的な教説に疑問を呈し、近代科学はデカルト主義とはまったく異なる基盤を必要としていると宣言する（CP 5.264-5.265）（パースの引用はすべて彼の著作集での巻と節で特定する）。彼の考えでは、我々は完全な疑いから始めることはできない。その代わりに彼は、あらゆる探究は、見せかけの疑いでは取り除くことのできない我々の見方の背景にある偏見から始まると主張する（Bernstein, 2010; p. 33; CP 5.265）。また、パースは、一個人を真理の絶対的な判断者にすることは悪であると述べている（CP 5.265）。ここで批判され

[2] 「我を思う、故に我あり」で有名なルネ・デカルトは、近代哲学の創建者と称され、それまでの中世のキリスト教神学に従属した哲学を、近代科学の出現にあわせるように刷新した（木田元, 2010; pp. 133-165）。

ているのは、多くの近代の認識論[3]の根底にある主観主義[4]である（Bernstein, 2010; pp. 35-36）。

このため、個人は間違っているかもしれない偏見を持って考えることを余儀なくされ、確かに信じられるものを頼ることができない。こうした制約を認めた上で、パースは、プラグマティズムとして真理を追求するための出発点として「プラグマティズムの格率」を提唱する。

> われわれの概念の対象が、実際的な影響を持つ可能性のあるどのような効果を持つか考えよ。これらの効果についての我々の概念が、対象についての我々の概念の全体である（CP 5.402）。

これを解説的に述べれば、内観によって得られた疑う余地のない前提を哲学の基礎としたデカルトとは異なり、パースは、我々が使用する概念が持つであろう実際的な影響を検討することによって、我々の探求を開始しようとするのである。その例として、彼は「硬い」という概念を取り上げている（CP 5.403）。「硬い」というのは、他の多くの物質とこすり合わせても傷がつかないということである。このように、「硬い」の概念の全体は、観察されうると考えられる潜在的な効果にあるのである。

実在論[5]を支持するパースは、外的実在と真理があると想定し、十分な経験的事実と確かな推論が真の結論を導くと考える（CP 5.384）。一方、「可謬主義」、すなわち我々が誤りうるということも彼の哲学の重要な構成要素である。我々の探究の第一歩は、我々が満足に知らないことを認めることである（CP 1.13）。彼は、あらゆる知識の主張には、挑戦、修正、訂正、そして拒絶の余地があるが、探求者の共同体としての探求の繰り返しにより、究極の知識に近づくことができると考えている（Bernstein, 2010; p. 36; CP 5.311 ）。

---

[3] 認識論とは、正しい知識（真理）がどのようなものであり、それをどのように手に入れるかを論じる哲学の一分野。

[4] ここでいう主観主義とは、人間は経験に基づくことなく、内観（理性）によって真理を知ることができるという立場であろう。

[5] 典型的には、実在論とは、外界は我々とは無関係に存在し、我々は適切な状況下において外界を正しく認識することができるという二つの考えが融合したものであるとされる（Wright, 1994; p. 1-2).

２−２．ウィリアム・ジェームズ

パースとジェイムズは、人間としての信念や実践を離れて真理という概念を検討することは不可能である、という同じ哲学的前提に立っていた（Misak, 2013; p.247）。しかし、彼らはこの前提から全く異なる、相反する結論に到達した。パースは哲学者であると同時に論理学者・物理学者であり、ジェイムズは哲学者であると同時に心理学者であった。この違いが二人の哲学に反映されているようにみえる。ジェイムズは、自分の哲学が科学的探究だけでなく、道徳や宗教といった人間の心理的欲求にも対応することを望んでいた（Bacon, 2012; p. 29; James, 1907a; p. 13）。また、神学的な考え方が人生において価値あるものであるならば、それは役に立つという意味で、つまりプラグマティズムの立場から真であるとした(James, 1907a; p. 29）。ジェームズは、善であることと真であることを同一視している。その結果、真理は幸福や満足のための道具であるから、真理は複数存在しうる（James, 1907a, p. 27）。ジェイムズの真理の多元的説明は、真理をすべての探究者が同意できる究極の意見と考えるパースのそれとは対照的である。しかし、彼が真理とは「我々の思考方法における有用なものでしかない」と言うとき、それは「長い目で見て」、「全体として見て」有用なものである（James, 1907b; p.150）と主張していることは注目に値するかもしれない。ジェイムズは、何が真実であるかについては比較的寛容な見方をしているが、それがつかの間の状況に応じてすぐに変わってしまうほどの有用さは望んでいないのである。

ジェイムズは、抽象的な概念の解釈はその実際的な帰結をたどることによってなされると述べ、パースのプラグマティックの格率と似た「プラグマティズムの方法」を表現している（James, 1907a, p. 18）。しかしジェイムズは、信念が特定の個人に対して持ちうる帰結を強調することで、パースと区別される（James, 1975; p. 258-259; Misak, 2013; p. 58）。この点で、共同体としての知的探求を重視するパースの考えと対照的である。

２−３．リチャード・ローティ

ローティは、その代表作『哲学と自然の鏡（Rorty, 1979）』において、知識の主張の根拠となる「知識の基礎」を主張するデカルト・カント派の伝統的哲学を否定している（pp. 3-13）。彼の考えでは、伝統的な哲学では、心は正確なものもあれば不正確なものもある様々な表象を映し出す「鏡」とみなされ、認識論としての哲学の役割は、鏡としての心を研究することによって知識の基礎を提供することであるとされる。この古い認識論に対して、ローティは、ある命題の真偽は鏡と鏡に映るものとの適切な関係、すなわち主体と客体との関係の問題ではなく、社会によって、すなわち

それを発した人の仲間たちがそれをどう扱うかによって決まる問題であるから、いかなる知識の基礎も不可能だと主張する（pp. 173-175）。このように知識の基礎の可能性を否定し、知識の社会的側面を認める彼の立場は、ローティが「反基礎づけ主義」、あるいは「プラグマティックな真理観」と呼んでいるものである。

換言すれば、この見解では正確な表象や真理の客観的な基準はなく、我々は各自が属する文化から物事を判断する「エスノセントリズム[6]」の観点から考えざるを得ない（Rorty, 1991; p. 26）。その結果、客観性という考え方は「強制されない合意」という考え方に置き換える必要があると主張する（p. 38）。そして彼によれば、知識の性質とは、様々な人々が何を信じるべきかについてどのように合意に達しようとしてきたかによって説明されるべきものなのである（p. 24）。

２−４．スーザン・ハーク

ローティに対抗して、ハークは客観的知識の存在を示そうとする。彼女は、『科学を守る（Haack, 2007）』と名づけられた著書の中で、「イノセント・リアリズム（素朴実在論）」と「クリティカル・コモンセンシズム（批判的常識主義）」を提唱している。彼女の言う「イノセント・リアリズム」は、相対主義と厳格な実在論の間に位置し、我々が共有する信念や意図は、部分的には社会的構成物ではあるが、世界は我々がどう信じるかとは独立していると認めるものである（Haack, 2002）。我々人間が生み出す世界の記述が真であるか偽であるかは、その内容と、世界がその内容の通りであるかどうかによって決まる。もちろん、そのような記述が何を言っているかは、我々の言語的慣習に依存している。

しかしそうではあっても、彼女の考えでは、その記述の内容が正しいか間違っているかは、世界がどのようなものであるかに依存するのである。「クリティカル・コモンセンシズム」という言葉は、もともとパースが作ったものである（CP 5.439）。ハークの考えによれば、科学における探究とは、最も普通の日常的な種類の経験的探究と変わらないものであり、ただより慎重で、詳細で、正確で、粘り強いアプローチで行われるにすぎない（Haack, 2007; p. 8）。同様に、優れたエビデンスや適切な探究の核となる基準は、科学に固有のものではなく、あらゆる種類の経験的探究に共通するものである（Haack, 2007; p. 23）。このように、科学は、適切な科学的専門知識を必要

[6] エスノセントリズム（ethnocentrism）とは、直訳すれば「民族中心主義」だが、日本語文献では「自文化中心主義」と訳されたり、そのまま「エスノセントリズム」と用いられることが多い。

とするものの、認識論的に特権的な地位を占めているわけではない。彼女はこの二つの考え方を組み合わせることで、日常的な経験的探求の高度化である科学は、徹底的に誤りやすく不完全ではあるが、ある程度客観的な真理を把握していると主張する（p. 124）。

２−５．まとめ

プラグマティズムについては、それぞれのプラグマティストが特徴的な考えを持っている。パースとジェイムズの間では、前者は経験的事実を集め、適切な推論を行うことで、誤りやすいながらも真実に近づくことができると考え、後者は科学的真実も宗教的信仰も、有用性という個人の観点から同じように理解しようとするものである。ローティとハークについては、前者は「正確な」表象などあり得ず「客観性」の概念として使えるのは「合意」だけだとし、後者は客観的真理があり科学はそれに基づく正当な探究であるとする。このような違いがある以上、プラグマティストの一部だけを取り上げても、プラグマティズムの全体像を把握することはできない。

このような大きな違いはあるものの、四人のプラグマティストは、何が陳述や信念を真にするのかを我々の経験的探求の前に定義しようとする形而上学[7]を否定し、代わりに、我々がすでに持っている信念や実践から探究を始めることを要求する自然主義に基づくという共通点がある（Misak, 2013; p. 247）。経験に基づかない内観によって知識の基礎を決定しようとしたデカルトの哲学は、プラグマティストが否定するこのような形而上学の一例である。自然主義的プラグマティストは、我々の探求は経験的に行われなければならないと主張する。つまり、パースが「プラグマティズムの格率」で、概念を理解するためには、その実践的帰結を見なければならないと定式化したように、哲学的理論を実践から生じさせ、信念を経験に結びつけなければならない（p. xi）のである。実践を重視する自然主義は、特に看護職が長い間悩まされてきた理論と実践の間のギャップに関連して、看護職にも示唆を与えることができるだろう。Younas（2020）が強調するように、プラグマティストの観点からは、思考やアイデアを明確にするだけでなく、それらが様々な臨床場面を包含する看護実践において

[7] 形而上学とは、英語でいう「メタフィジックス（metaphysics）」の訳語であり、「meta」は「超える」という意味があるため、「自然を超えた事がらに関する学」という訳をつけることも可能である（木田, 2010; pp. 96-103）。形而上学では自然を超えた超自然的原理（例えばプラトンのイデア、神、理性など）を設定し、考察を行うため、形而上学には人間は自然を俯瞰的立場から眺めることができるという西洋哲学の伝統が表れていると言える（木田, 2010; pp. 22-24）。一方、プラグマティズムが標榜する自然主義とはこれに正面から意義を唱えるものである。

有用な結果を達成しているかどうかを評価することが必要である。また、看護学は科学の体裁を取ろうとして経験的知識を獲得する前にまず看護学の知識の形式を決定しようとすることがあるが、自然主義の立場からはそのようなことは必要ない、と言えるだろう[8]。このような自然主義に基づく提案は、看護理論が臨床実践から乖離しないようにすることで、理論と実践の間のギャップを埋めることにつながるだろう。

次節では、四人のプラグマティスト違いに立ち戻り、彼らの客観性の捉え方の違いに着目し、それが看護学とどのように関わってくるのかを考察する。

３．プラグマティズムにおける客観性

一般市民の科学への賞賛は、科学は客観的であるという見方からその多くが起因している（Reiss & Sprenger, 2017）。客観性の理論的根拠の有力な候補の一つは、信念が世界の事実と対応する限りにおいて真であるという真理の対応説であろう。しかし、真理の対応説に代わるものとして、プラグマティズム的な理論がしばしば提唱される（Capps, 2019）。パースもジェームズも、対応説は何が信念を真とするのか具体的な言葉で説明しないので、役に立たないとしている（James, 1907, p. 27; CP 5.553）。では、科学に不可欠と思われる客観性は、プラグマティズムにおいてどのように説明されるのだろうか。予想されるように四人のプラグマティストの説明は大きく異なる。

パースは実在論者であり、我々の信念とは無関係に実在するものが存在し、我々は感覚と理性によってそのあり方を確かめることができると仮定している（Misak, 2013, p.51; CP 5.384）。実在論は彼の科学的探究の方法論を支える前提条件となっており、そのため実在論の真偽自体は科学的探究によって直接確かめることはできないとされる。この意味で、彼は実在論を、それなしには探究を始めることができない「基本的仮説」と呼んでいる。客観性に関連してパースの見解では、実在の把握には、信念に対する外在性と依存性という二つの相反する様式がある（CP 7.336-7.339）。彼のアナロジーによれば、「ダイヤモンドは硬い」という事実は、ダイヤモンドがダイヤモンドであり始めたときから硬かったという意味で、我々にとって外在的であると同時に、我々が何かを力強くこすっても傷がつかないというような何らかの事実を観察しない限り、その硬さは現れないという意味で、我々に依存している（CP7.340）。つまり、常に存在するものについての我々の知識は、ある機会が生じたときに、ある考えが我々の心に浮かぶからこそ存在するのである（CP 7.342）。

---

[8] この点については、「４．ハークの優れたエビデンス」の「理論の構造（p. 11）」と「看護の独自性（p. 11）」に関する記述も参照。

これに対して、ジェイムズは、客観性とは我々の思考と絶対的実在との絶対的対応関係であると考え、それを「非実用的」かつ「空虚な概念」として否定する（James, 1907a; p. 27）。彼にとって、真理は「経験において望ましい具体的結果を生み出すようなすべてのものを含む分類名（p. 27）」であるため、複数の形態で存在する。この主張は、プラグマティズムを通じて経験主義的な思考方法と人間の宗教的な要請を調和させたいという彼の希望を反映している（p. 27-9）。

ローティは、ジェームズとともに、上述したように客観性を否定する。彼によれば、実在論者の哲学的思考の要諦は、特定の共同体や文化から自らを切り離し、より普遍的な立場から俯瞰することにあると考えている（Rorty, 1991; p. 30）。その上で彼は、そのような立場（客観性）は不可能であり、「エスノセントリズム」こそが唯一の有力な選択肢であるとみている。こうして、科学はその認識論的な特権的地位を奪われ、文学や芸術と同じ土俵に立つものとなる（Rorty, 1982; p. xliii）。ローティにとって、概念は、有用であったり無用であったり、善であったり悪であったり、助けとなったり誤解を招くものであったりするが、「客観的」であったりなかったり、「科学的」であったりなかったりするものではない（Rorty, 1982; p. 203）。一方で彼は、科学者同士の会話を通じて「強制されない合意」が達成される「人間の連帯のモデル」として、科学を高く評価している（Rorty, 1991; p. 39）。

看護実践を科学的研究によって根拠づけようとするならば、科学の客観性を否定し、科学的知識を単なる合意と見なすローティの考え方は、受け入れがたいものであるように思われる。科学を擁護するハークは、素朴実在論を持ち出して、客観的真理は可能であると主張する。たとえ我々の知覚能力が不完全で限定的であり、我々が知覚したものに対する判断が、背景となる信念や期待に影響されて誤りやすいとしても、我々人間は世界がどのようなものであるかを知ることができる（Haack, 2002; p. 86）。彼女はローティとともに、科学は「深く社会的な事業」であり、科学は認識論的に特権的なものではないことを認めている（Haack, 2007; p. 23）。それでも彼女は、優れたエビデンスとよい探求の核となる基準があり、それは科学だけにあるのではなく、あらゆる種類の経験的探求に共通していると主張している（p. 23）。次節では、優れたエビデンスに関する彼女の見解を詳しく見ていくことにする。

ジェームズとローティが客観性を実在と対応するものと考え、それを否定するのに対し、パースとハークは常識的実在論に依拠することで客観性を維持できると考えている。この違いは彼らの科学に対する考え方を反映しており、ローティは科学を「連帯」として考えている。ハークは客観的な真理があると主張し、科学がその一部の発見に成功することもあるが、真理は必ずしも明らかではなく、進歩は保証されないと

認めている（Haack, 2007; p. 124）。四人のプラグマティストの見解の簡潔な比較は表1を参照されたい。

表 1：四人のプラグマティスとの比較

	パース	ジェームズ	ローティ	ハーク
真理について	客観的真理は存在し、集団としての継続的な探求を通じてそれを獲得できる。	真実は多元的である、なぜならそれぞれの人は幸福や満足のために独自の真実を持つことができるからである	真実は社会的合意である。	客観的な真理は存在するが、それは必ずしも明らかではなく、エビデンスと他の理論との一貫性を通じて近づくことができる。
実在論について	「基本的仮定」として実在論を受け入れる。	実在と我々の心の対応とは空虚な概念であるとして、実在論を否定する。	実在論者は普遍的な立場からものを見ようとしているが、それは不可能であるとして、実在論を否定する。	「素朴」かつ「穏健」な実在論を受け入れる。

患者、臨床看護師、政策立案者としては、通常、意思決定のために知識の客観的正当性を必要とするので、科学についてハークの側に立つことが望ましいと言える。ハークは「素朴実在論」と「批判的常識主義」に基づいて看護の知識体系を正当化することができ、我々の常識に合致しているようにみえるので、多くの人に受け入れられるだろう。しかし、看護における質的研究の意義とその倫理的意義に注目すると、ローティの意見も注目に値するだろう。質的研究は、客観的というよりは主観的であり、価値中立というよりは価値負荷的であり、非関与的というよりは関与的である（Risjord, 2010; p. 190）。ローティは、客観と主観、事実と価値の区別を曖昧にし、科学の客観性という特権的地位を奪っている（Rorty, 1991; p. 38）。したがって、彼の哲学は質的研究の理論的基盤を提供するかもしれない。彼はまた、「客観性」の代わりに「強制されない合意」の考え方を推奨している。この転換は、我々をリベラルな態度に導く。そして、「できる限り多くの提案や議論に耳を傾ける（p. 39）」ことで、各自が属する共同体を超えた人間的な連帯を生み出すことを目指す。彼の「寛容」で「解放的」な視点（Isaacs et al., 2009）は、客観性だけを重視する科学主義や、他者の

意見に耳を貸さず自分の正しさだけを主張する独断主義に異議を唱えるものとして、看護にとって有意義なものであると言えよう。ジェームズもローティと同様、客観性を否定するが、真理を個人的なものとする。その結果、必然的に真理は一つではなく、複数の真理が存在することになる。このことは、それぞれの異なる背景を持つ個々の患者の状況を改善することに関心を持つ看護師にとって興味深いであろう。

看護においてはこれまで、客観性について様々な議論がなされてきた（Hussey, 2000; Kagan et al., 2010; Paley, 2005; Theodoridis, 2018）。客観性をどう捉えるかについて相反する主張を持つプラグマティズムは、客観性をめぐる賛成派と反対派の両グループを参考にするならば、議論に大いに役立つことは間違いないだろう。

４．ハークの優れたエビデンス

ハークにとって、エビデンスは「経験的エビデンス」と「理由」の二つの要素に分けられる（Haack, 2007; pp. 60-68）。経験的エビデンスとは、人が見たり聞いたりしたさまざまな知覚できる出来事を指し、科学ではしばしば計測器が媒介となる。経験的エビデンスは命題ではなく、知覚的相互作用で構成され、正当化のための保証を必要としない。これに対して、理由とは、問題となっている主張に多かれ少なかれ信憑性を与える背景信念のことである。経験的エビデンスとは異なり、理由は命題的である。ある主張がどの程度保証されるかは、それが経験的エビデンスと理由とによってどの程度支持されているか（支持性）、それらの理由が問題となっている主張から独立してどの程度保証されているか（独立性）、それらのエビデンスが関連するエビデンスをどれだけ含んでいるか（包括性）によって決まる。

このようにエビデンスを強くしたり弱くしたりするエビデンスの質は、支持性、独立性、および包括性に依存すると考えられる。エビデンスの質の決定要因は多次元的であるため、エビデンスの質の判断は単純な論理関係では決まらない（p. 68）。さらに、エビデンスの質の判断はパースペクティヴァル（見方に依存的）であり、つまり、判断を下す人の背景信念に依存する（p. 76）。とはいえ、ハークの主張によれば、エビデンスの質自体は客観的なものである。なぜならエビデンスが当該問題に関連するかどうか、およびエビデンスがどの程度保証されているかは客観的な問題であるからである（p. 77）。したがって、エビデンスの質は本質的には主観的なものでも、パラダイム[9]に相対的なものでもない。

[9] パラダイムとは、研究質問に答えるために、研究質問を組み立て、適切な実証データを特定し、潜在的な説明的結論を生成する枠組みである（Nairn, 2019）。

これらのハークの議論は、看護におけるいくつかの長年の議論に示唆を与えるかもしれない。その一つは、理論の構造に関するものである。実証主義[10]では、理論をピラミッド型と想定しており、少数の一般法則がより多くの中間的な理論を支えられ、中間的な理論がさらに多くの観察によって支えられている（Risjord, 2010; pp. 131-132）。しかし、このような実証主義の理論構造は実際には不可能であり（Bluhm, 2014; Risjord, 2010; p. 132）、代わりに正当化の一貫性理論（coherence theory of justification）が提案されている（Risjord, 2010; pp. 132-134）。リスジョードはクワイン（Quine, 1951）[11]を引用して、蜘蛛の巣のアナロジーを用いて一貫性を説明している。それよれば、科学全体は一つの蜘蛛の巣に例えられ、一つ一つの理論は糸の交叉点に対応し、相互に支え合う関係にあり、巣の縁には観察という固定点があり全体を支えている。したがって、ある理論が正当化されるのは、観察との整合性だけでなく、他の理論との整合性によってである。このようにリスジョードの正当化の一貫性理論が、ハークの優れたエビデンスの議論と整合的であることは明らかである。

第二に、ハークの考えは、看護という学問の独自性の問題にも関連している。彼女の考えでは（リスジョードも）、ある理論がより正当化されるためには、他の理論によって支持される必要がある。したがって、看護学という学問が科学的に信頼できるものになるためには、他の学問分野とより密接に関連づけなければならない。それぞれの学問分野が独立したピラミッドのように観察の基盤の上に立ち、大理論を戴いているとみなし、看護の学問もその一つにならねばならないと考えるのは誤りである。看護の学問の独自性に関連して、このような誤った学問観は、看護学を看護師や看護研究者のニーズにそぐわないものにしているとブルーム（Bluhm, 2014）は主張している。実践的志向に根ざしたパースのプラグマティズムの格率に従うならば、看護学問の独自性は、看護実践の違いを説明し、生み出すことのできる理論の開発に求められるべきだろう。

第三に、エビデンスの質に関する我々の判断は常にパースペクティヴァルであるが、エビデンスの質そのものは客観的であるとするハークの主張は注目に値する。看

[10] ここで用いられている「実証主義」とは、論理実証主義と同義と考えられる。
[11] このクワインの論文は、論理実証主義の前提を根本から覆すものとみなされている（Misak, 2013, p.200）。クワインは著名なプラグマティストでもあるので、彼の主張がハークの主張と重なるのは当然のことであろう。

護哲学の分野では、リスジョードが文脈主義[12]と実在論の関係を論じ、両者は両立すると結論づけている（Risjord, 2010; pp. 165-167）。ハークの提唱する客観性は実在論に裏打ちされているので、ハークとリスジョードは本質的に同じことを議論し、同じような結論に至っているのである。

５．認識論的相対主義

認識論的相対主義とは、客観的に知識を得る可能性についての疑念から、何を知識とみなすか、あるいは信念が合理的か正当かなどを決める規範は、概念や文化の枠組みによって変化するという主張である（Baghramian & Carter, 2021）。看護研究者の中には、このような相対主義を擁護するためにプラグマティズムを採用する人たちがいる。

ドアンは、看護臨床家としての自分を助けたプラグマティストとして、ジェームズ、デューイ、ローティの名を挙げ、日々の実践における哲学的探究は、我々の経験の深いところの声に耳を傾け、いかなる知識や真実をも超えて物事をみる機会を与えてくれると主張している（Doane, 2003）。また、プラグマティズムの哲学は、我々が「知っている」と思っていることや、どのように行動するのが最善かを常に問い直し、看護の瞬間ごとに自分自身と実践を作り直すよう促してくれる、と主張している。ウォームズとシュローダー（Warms and Schroeder, 1999）は、ローティのプラグマティズムの中に、科学的理論と実践との乖離に対する解決策を見出そうとしている。彼らは、真実についての一般化された基準はなく、エスノセントリズム（上述）からの判断しかないこと、客観／主観、合理／非合理、真／偽の区別は役に立たないことなど、ローティによるいくつかの考えに言及している。彼らが提案する解決策は、できるだけ多くの提案や議論に耳を傾け、自分の信念と提案された複数の選択肢を対比し、その時、その場所、その状況にとって最良の解決策や答えを提供するものを選ぶことであり、「真実」に最も近いものを選ぶことではない。

同様に、マクレディ（McCready, 2010）は、看護における理論と実践のギャップについて、ジェームズの「真理は道具である」という信条、つまり、理論の真実性はその実用的価値によって測られることを引き合いに出している。したがって本来、目標

---

[12] 文脈主義とは英語の contextualism の訳語であり、我々のものの見方には文脈依存性があるとする立場（「５．認識論的相対主義」の「文脈依存性」を参照）。ハークが、我々の見方が「パースペクティヴァル」であると主張するとき、それは「文脈依存性がある」という表現でも言い換え可能であると考えられる。

を共有する応用的な学問分野では、理論と実践のギャップが生じる理由はないはずである。マクレディは、実用的価値の評価は主観的で視点（パースペクティブ）に依存的であるため、真理は視点に依存した主観的信念になると主張する。その結果、真理は必然的に多元的なものとなる。これらの主張に基づいて、看護の知識開発において開かれた対話を通じてお互いを理解し、「統一された多様性」をもたらすことが求められるとする。

これらの議論に共通するのは、知識の文脈依存性や主観性を重視し、客観的な科学知識に疑いを投げかける認識論的相対主義の傾向が見られることである。文脈依存性とは、知識の形成が、それを生み出す人のそれまでの経験や信念、その人を取り巻く状況や文化など、さまざまな要因に影響されることをいう。今回紹介した四人のプラグマティストは、程度の差こそあれ、いずれもこの考えを支持している。ただし、パースとハークは文脈依存性にもかかわらず客観的な知識は可能であると主張しているため、認識論的相対主義を志向する人々が、プラグマティストの指針として、パースやハークではなく、ジェイムズやローティを支持するのが自然であろう。

プラグマティストは、認識論的相対主義を擁護するためにしばしば引用される。このことは、看護におけるプラグマティズムを偏った見方で見ることになりかねない。同様に、ガレットとカッティングは、看護においてプラグマティズムがどのように説明されているかについて次のようにまとめている（Garrett＆Cutting, 2015）。すなわち、看護においては「プラグマティズム」というラベルが、普遍的なものや抽象的なものの存在に異議を唱え、現象を社会文化的考察の観点から説明しようとする唯名論者[13]の立場と同義になっていると主張する。彼らがこの主張で念頭に置いているプラグマティズムとは、エスノセントリズムを標榜するローティのそれであろう。ガレットとカッティングは、このようなプラグマティズムではなく、科学的方法を用いて競合する仮説を検討し、経験的に最適な説明の枠組みを選択し、その方法によって得られた知識を、必ずしも真実ではないとしても、実践的に役立つものとして捉える「現代的実証主義科学的プラグマティズム（modern postpositivist scientific pragmatism）」を提唱している。ここでいうプラグマティズムとは、たとえ誤る可能性があるものの、

[13] 唯名論とは一般に、実在は個別の事物のみであるとし、普遍や抽象的なものの存在を否定する立場である。したがって、例えば「数」や「人間」といったものが普遍や抽象的なものを指すとするならばそれは実在せず、（ガレットとカッティングの主張に沿えば）それらは単に人間社会の習慣で使っている言葉にすぎないということになる。

プラグマティズムの枠組みのもとで客観的な知識にアクセスすることを可能としているパースやハークのそれと整合的なものに違いない。

６．看護における実在論

キクチとシモンズ（1999）が提起した「穏健な実在論」は、看護の文献では看護哲学者の実在論として参照されている（例えば、Liu, 2006; Risjord, 2010; pp. 165-166）。この考え方は、パースやハークがプラグマティズムで採用した「常識的実在論」に対応するものであると思われる。穏健な実在論では、主に三つの特徴が指摘できる。第一に、常識は世界に関して、科学的営為の基盤となる客観的知識を与えてくれる。第二に、実在に関する我々の主張は、主張を行う文脈に依存することを認めつつも、ある程度は実在を反映することが可能であるとしている。第三に、科学的探求によって得られる知識や理論は、絶対的な真理ではなく、蓋然的な真理であり、それゆえ誤りを犯す可能性がある。これらはすべて、明らかにパースやハークの実在論に沿ったものである。それにもかかわらず、キクチとシモンズは、プラグマティズムが看護の本質を含む物事の本質を「何がうまくいくか」という観点から定義することを求めていると考え、プラグマティズムは不適切であると考えている（Kikuchi & Simmons, 1994）。なお、これを主張した論文の中で、キクチとシモンズがプラグマティストとして指しているのは、パースではなく、ジェームズとデューイのことであると、彼ら自身が述べている。

実在論や客観性を擁護する科学的な見方を提唱するパースやハークのようなプラグマティストへの関心が薄いことにより、看護界においてプラグマティズムの伝統に偏った理解をしてしまうことになりかねない。これは、冒頭で述べたように、様々な立場を単なる「イズム」として分類することが、その中の多様性を無視することを助長しかねない危険性を示す一例と言える。プラグマティズムに関心を持つ看護哲学者、特に実在論を擁護しようとする哲学者は、パースとハークに注目することが求められる。

７．クリティカル・リアリズム

穏健な実在論に加え、看護学でよく挙げられるのが、バスカール（Bhaskar, 2008）が提唱する「クリティカル・リアリズム（Critical Realism）[14]」である（Porter, 2001; Wainwright, 1997 など）。看護におけるその利点は、哲学的な視点だけでなく、研究方法論の指針を提供することである。本節では、クリティカル・リアリズムとパース流のプラグマティズムの類似点を指摘することで、100 年以上前のパースの思想が、今日でも看護に重要な示唆とインスピレーションを与えることができることを示す。

科学的探求に関して、バスカールは「他動的（transitive）」次元と「自動的（intransitive）」次元を区別している（Bhaskar, 2008; pp.11-14）。他動的次元では、科学は人間による先行する知識や人間の活動に依存している。自動的次元では、科学の対象、すなわち現象を生み出す構造やメカニズムは、人間の知識や経験とは無関係に存続・作動するため、人間からは独立している。彼によれば経験主義は、科学の社会的性格を認識しないことで他動的次元を無視し、事実や事象のみに関心を向けてしまいその背後にある構造やメカニズムを認識しないことで自動的次元を無視している（pp. 16-17）という。一方、観念論[15]は、自動的次元を無視して、知識の対象が思考とは無関係に存在することを認識せず、それらの対象に発見された秩序は、実は人間の認識活動によって課せられたものであると主張する（p. 17)。このような他動的と自動的の区別は、パースが主張した、我々の知識が我々の信念の外部にある実在と、我々の信念そのもの両方に依存しているという科学的知識の二つの側面を想起させるものである。

知識の他動的・自動的次元を考えると、クリティカル・リアリズムにおける客観性の確保は微妙な問題である。バスカールは、物事の本質には客観的なつながりがあり、それは永続的なメカニズムとして特定することができる（Bhaskar, 2008; p. 213）と主張する一方、科学における物事や事象に関する我々の記述は、常に多かれ少なかれ理論的に決定されている[16]（pp. 240-241）。また、世界の中立的な描写はなく、認識

---

[14] 「クリティカル・リアリズム」は日本語に訳せば「批判的実在論」となるが、日本語文献では「クリティカル・リアリズム」として訳さず言及されることが多いため、本稿もそれに従う。

[15] 観念論は、それが使われる文脈によって意味がさまざまに変わりうる（Guyer & Rolf-Peter, 2022）が、この文脈では反実在論の意味で使用されているであろう。つまり、実在は我々の認識を離れてはあり得ないとする立場である。

[16] どんな理論とも無関係な中立なものの見方は存在しないため、ものを見て記述するときには前提となる理論が必ずあるはずである。これが「理論的に決定されている」ということである。

論的相対主義は存在論的実在論の付随的要素であり、受け入れなければならないとしている。それにかかわらず、我々の操作能力によって自然の流れ（事象の流れ）に干渉することで、実在を確認し、仮説的な生成メカニズムの作動を研究することができるため、生成メカニズム、事象、経験に関する我々の記述は実在を反映することができると主張している（pp. 232-233）。認識論的な相対主義にもかかわらず、生成メカニズムに関する客観的な知識を得るために、バスカールは「リトロダクション」を含む方策を考案している。しかし、これはパースが用いている方法と類似している。

リトロダクションとは、クリティカル・リアリズムの重要なプロセスであり（Bhaskar, 2011; p. 70; Maxwell & Mittapalli, 2010; McEvoy & Richards, 2003）、アナロジーやメタファーの論理を用いて仮説モデルを構築し、経験的現象を生み出すとされる真の構造・文脈・メカニズムを明らかにするプロセスである（Bhaskar, 2011; pp. 15-16; Maxwell & Mittapalli, 2010）。実際のところ、演繹、帰納と並ぶ第三の推論方法である「アブダクション推論（abductive inference）[17]」を展開したのはパースである（彼はこれを「リトロダクション推論（retroductive inference）」あるいは単に「仮説(hypothesis)」と呼ぶこともある）（Misak, 2013, pp.47-48)。パースは、アブダクション推論をプラグマティズムの格率と密接に結びつけて考えており、プラグマティズムとはアブダクションの論理にほかならないとさえ述べている（CP 5.196）。彼のプラグマティズムでは、探求は、問題となっている現象を説明するために新しいアイデアや仮説を考案し、次いで仮説の演繹的な帰結を集め、そしてそれらの帰結を帰納的に確認するという三段階からなり、アブダクションはその第一段階にあたる（Mirza, Akhtar-Danesh, Noesgaard, Martin, & Staples, 2012; Peirce, 6.469-6.473) 。バスカールは生成メカニズムの特定に導く方法として「3 段階のスキーマ」（Bhaskar, 2011, p.54）を提唱している。それは、現象（または現象の範囲）を特定し、その現象の説明を構築し、説明を経験的に検証するという一連の流れであるが、パースのものと両立するように見える。同様に、ハートウィグも、リトロダクションを伴うクリティカル・リア

[17] アブダクションという言葉は聞きなれないかもしれない。しかしそれは、研究だけでなく、臨床現場や日常生活でも行っていることを精緻化したものであると言える。保健医療におけるアブダクション推論の概念分析を行った Mirza ら（Mirza, Akhtar-Danesh, Noesgaard, Martin, & Staples, 2012）によれば、アブダクションは仮説や理論の生成のプロセスとしてだけでなく、競合する仮説を評価してその中から最良の説明を選択する推論としても記述されている。彼らによれば、アブダクション推論は、新人臨床医の推論能力の向上や問題解決型学習の強化に貢献する新しいアプローチであるとされている。

リズムの方法論は、パースのアブダクションと非常に似ていると指摘している（Hartwig, 2007; p. 195; Mingers, 2012）。

本節では、バスカールのクリティカル・リアリズムとパースのプラグマティズムの類似点をいくつか検討した。看護学においてクリティカル・リアリズムが注目されていることを考えると、看護学における実在性・客観性の保持を望む多くの人々にとって、パースのプラグマティズムもまた支持される可能性がある。このように、パースのプラグマティズムは、客観性を認め、科学的知識の正当性を擁護するだけでなく、クリティカル・リアリズムのようなより現代的な科学哲学とも共有点があることが特徴である。このことは、客観性に否定的な立場をとり、科学的知識の正統性に寄与しないジェームズやローティのプラグマティズムと対照的である。

８．ミックスメソッド研究

看護学分野ではミックスメソッド研究（mixed-methods research）が盛んであるが、その哲学的な裏付けについては議論がある（Allmark & Machaczek, 2018; Lipscomb, 2008）。ミックスメソッド研究は、質的調査と量的調査の両方を行うものであり、それぞれが異なるパラダイムからのものであれば、それらの融合には正当性が必要となる。プラグマティズムは、複数の方法を受け入れるため、その候補として有望である（Kaushik & Walsh, 2019）。クレスウェルらは、プラグマティズムは真理をその時々において有効なものと考え、哲学や実在の一つのシステムに拘束されないため、プラグマティストである研究者は、研究問題の最良の理解をもたらすならば、量的データと質的データの両方を使用すると論じている（Creswell, 2014; p. 11）。

ミックスメソッド研究の指針となる理念として、プラグマティズムではなく、リアリズム（特にクリティカル・リアリズム）を主張する者もいる。リプスコムは、プラグマティズムに基づくアプローチが、理論的議論やミックスメソッドをめぐる問題が提起する哲学的疑問に対する無関心な態度と結びついたとき、看護研究における明示性と明晰性がおそらく損なわれると批判している（Lipscomb, 2008）。彼は、ミックスメソッド研究法の指針となる哲学として、バスカールのクリティカル・リアリズムの理論を推奨している。それは、同理論が基礎とする存在論[18]、認識論、方法論の前提の間に論理的なつながりが存在することを認めるからである。また、アルマークとマハチェックは、プラグマティズムよりも実在論を支持し、我々の知識が目的に依存す

[18] 存在論とは、存在することとはどういうことか、また世界に何が存在するかについて論じる哲学の一分野。

るとしている点でプラグマティズムのアプローチは首尾一貫した知識体系を開発することが難しいが、実在論者は心や人間の目的から独立している世界を仮定することによってこれを実現できると主張している（Allmark & Machaczek,2018）。

しかし、これらのプラグマティズムに対する見方は一面的であろう。パースの著作に注目すれば、プラグマティズムとリアリズムは両立するように思われる。パースは実在論者の立場から、実在するものは我々の意見とは無関係であり、規則的な法則に従って我々の感覚に影響を与え、我々は十分な経験と理性によって真実に近づくと仮定している（CP, 5.384 ）。すでに我々はパース のアブダクション(リトロダクション)をみたが、プラグマティズムとクリティカル・リアリズムの間には、さらに、知識の誤りやすさ(Bhaskar, 2008, p.33) 、事実／価値の区別の喪失 (Bhaskar, 1998; pp. 409-443）、認識論的相対主義などの共通点をもつ（上述した様に、「知識の誤りやすさ」は パースとハークの、「事実と価値の区別の喪失」はローティの、「認識論的相対主義」はジェームズとローティの哲学的特徴である）。プラグマティズムとリアリズムは、その本質において必ずしも矛盾するものではなく、また、プラグマティズムの中にも様々な思想や伝統があることから、プラグマティズムかリアリズムかという二元的な選択は見当違いである可能性がある。むしろ、ミックスメソッドをめぐる個々の哲学的な問題に焦点を当てた方が生産的であると、筆者は考える。

ミックスメソッド研究法におけるプラグマティズムのもう一つの論点は、存在論や認識論よりも方法論が優先されることである。社会学者のモーガンは、社会学で広く受け入れられている質的研究を導く形而上学は、方法論よりも認識論を優先するだけでなく、認識論や方法論よりも存在論の問題を強調する傾向が強いことが特徴であると述べている（Morgan, 2007）。これに対し、プラグマティストは、量的・質的アプローチを組み合わせた研究のための道を開くため、認識論的・存在論的議論はわきに置き、特定の研究課題に答えるための特定の研究方法の妥当性の問題を優先する方法論的アプローチを採用している（Bryman, 2006; Kaushik & Walsh, 2019）。このプラグマティズム的なアプローチは、一種の問題志向型とみなすことができ、知識の臨床的価値を強調する看護のスタンスと一致する。看護における質的研究法と量的研究法の区別については、リスジョードも概ね同様の主張をしている。彼は、もし方法論の選択が存在論や根源的評価へのコミットメントに関わる決定であるなら、そのようなコミットメントは研究活動を前進させない、と主張している（Risjord, 2010; p. 212）。方法論の問題は、グローバルな問題ではなく、研究対象となる人、物、出来事、プロセスの特定の特徴にどの方法が適合するかというローカルな問題である（p. 211）。こうした彼の主張は、すでに持っている信念や実践から探究を始めなければならないとい

うプラグマティズムの一般的な特徴、すなわち自然主義に合致しているように思われる。

まとめると、看護学においてプラグマティズムはミックスメソッド研究法を正当化する哲学としては優勢ではない。しかし、パースの実在論やアブダクション推論、プラグマティストが存在論や認識論の議論よりも方法論を優先させるという点など、プラグマティズムの個別の主張に注目するならば、ミックスメソッド研究法の哲学的基盤にプラグマティズムの考え方の一部を生かすことができるかもしれないということである。

９．研究の限界

本稿では四人のプラグマティストに着目し、看護の哲学との関連について考察したものであるが、「１．はじめに」で述べたようにプラグマティズムは多様であり、プラグマティズムの概要を示すことは本研究の範囲を超えている。この四人以外にも看護の哲学において言及する価値があると考えられる優れたプラグマティストがいることは明白であり、例を挙げれば、多様な価値観を前提とした民主主義を論じたジョン・デューイ、全体論を唱えたウィラード・ヴァン・オーマン・クワイン、心理や言語など幅広い見地から哲学を論じたヒラリー・パトナムなど枚挙にいとまがない。四人以外のプラグマティストから看護が貴重な示唆を得る潜在性は十分に想定でき、よって本稿における議論は、看護におけるプラグマティズムの持つ可能性のごく一部に過ぎないと言える。

また、本稿はプラグマティズムの看護の哲学への適応可能性について複数のテーマを扱っているため、個々のテーマについてさらなる検討の余地は大きいと考えられる。プラグマティズムの思想を今後の看護に具体的に活かすために、個別のテーマについて論考を深めることが必要であると考える。

１０．結論

本稿では、四人のプラグマティストの思想を概観し、その共通点と相違点を分析した。パースとハークは客観的真理が存在するとし、実在論の立場をとる。これに対して、ジェームズとローティは、客観的な真理を得ることは不可能であるとし、認識論的相対主義を志向している。したがって、プラグマティズムをよりよく理解するためには、両方の立場を参照する必要がある。一方、四人に共通するのは、経験に基づかない形而上学を否定し、我々の理論を我々の実践から生じさせることを求める自然主

義である。この自然主義の経験主義的志向は、看護における理論と実践の間のギャップを埋めるのに役立つと思われる。

本稿では、これまで看護学において論じられてきた認識論的相対主義、実在論、ミックスメソッド研究法などを参照しながら、プラグマティズムを考察している。特に、認識論的相対主義はジェームズやローティのグループと、実在論はパースやハークのグループと親和性を持っている。ミックスメソッド研究の観点からは、パースの実在論とプラグマティズムの自然主義が参考になるとした。プラグマティズムがこれらのどのテーマにも関連し示唆に富むことを示すことで、プラグマティズムの多様性が、今後、看護師や看護研究者に多くの示唆を与える可能性があることを明らかにした。

本稿の文献レビューから、看護学ではジェームズやローティ流のプラグマティズムが優勢であることが伺える。ジェームズとローティの、知識の文脈性や主観性を重視し、客観的な科学知識を疑問視する認識論的相対主義への傾向は、それらを引用した看護研究者にアピールするものであった。しかし、そのことが、実在論や客観性を擁護する科学観を提唱するパースやハークなどのプラグマティストを軽視することにつながったのではないだろうか。その結果、プラグマティズムの伝統に対する一面的な理解が促進される可能性がある。プラグマティズムに関心を持つ哲学者、特に実在論を擁護しようとする哲学者は、パースとハークを研究すべきであると提言する。

ここで取り上げた四人以外にも、多くの哲学者がプラグマティストとみなされていることに留意することが重要である。ここで取り上げたのはプラグマティズム全体のほんの一部であり、プラグマティズムの中には、看護の未来に貢献する可能性を秘めた、より広い範囲のものが存在する。本稿で取り上げていない重要なプラグマティストとしては、プラグマティズムと民主主義の関連に関心を持つジョン・デューイやヒラリー・パトナム（Bernstein, 2010; pp. 163-167; Misak, 2013; p. 238 ）などが挙げられよう。

バーンスタインは、プラグマティズムに関する言説は終わりのない会話として考えるのが最善であると主張した（Bernstein, 2010; pp. 30-31）。彼はそれを、ディナーパーティーで起こる混沌とした会話に例えている。そこでは、誤解や行き違いがあり、衝突や矛盾がある。しかし、なぜか会話全体は、個別の一人の声を聞かされるよりも、生き生きとし、啓発的である。看護は、さまざまな場面、問題、意見を含んでいるため、そのような議論の場にふさわしいはずであり、そのような看護の場でプラグマティズムの多面的な考え方が今後も活発に議論されることが期待される。

なお、本研究成果の主要部分はNursing philosophy誌 に投稿し、オンライン版として掲載されている （https://onlinelibrary.wiley.com/doi/10.1111/nup.12414） 。

文献

Allmark, P., & Machaczek, K. (2018). Realism and Pragmatism in a mixed methods study. Journal of Advanced Nursing, 74(6), 1301–1309. https://doi.org/10.1111/jan.13523

Bacon, M. (2012). Pragmatism: An introduction. Polity.

Baghramian, M., & Carter, J. A. (2021). Relativism. In E. N. Zalta (Ed.), The Stanford encyclopedia of philosophy. Metaphysics Research Lab, Stanford University. https://plato.stanford.edu/archives/spr2021/entries/relativism/

Bernstein, R. J. (2010). The pragmatic turn. Polity.

Bhaskar, R. (1998). Facts and values: Theory and practice. In M. Archer, R. Bhaskar, A. Collier, T. Lawson, & A. Norrie (Eds.), Critical realism: Essential readings (pp. 409–443). Routledge.

Bhaskar, R. (2008). A realist theory of science. Routledge.

Bhaskar, R. (2011). Reclaiming reality: A critical introduction to contemporary philosophy. Routledge.

Bluhm, R. L. (2014). The (dis)unity of nursing science. Nursing Philosophy, 15(4), 250–260. https://doi.org/10.1111/nup.12062

Bryman, A. (2006). Paradigm peace and the implications for quality. International Journal of Social Research Methodology, 9(2), 111–126. https://doi.org/10.1080/13645570600595280

Capps, J. (2019). The pragmatic theory of truth. Retrieved August 15, 2021, from https://plato.stanford.edu/archives/sum2019/entries/truth-pragmatic/

Corry, M., Porter, S., & McKenna, H. (2019). The redundancy of positivism as a paradigm for nursing research. Nursing Philosophy, 20(1), e12230. https://doi.org/10.1111/nup.12230

Creswell, J. W. (2014). Research design: Qualitative, quantitative, and mixed methods approaches (4th ed.). Sage Publications.

Doane, G. H. (2003). Through pragmatic eyes: philosophy and the re-sourcing of family nursing. Nursing Philosophy, 4(1), 25–32. https://doi.org/10.1046/j.1466-769X.2003.00112.x

Garrett, B. M., & Cutting, R. L. (2015). Ways of knowing: Realism, non-realism, nominalism and a typology revisited with a counter perspective for nursing science. Nursing Inquiry, 22(2), 95–105. https://doi.org/10.1111/nin.12070

Guyer, P., & Rolf-Peter H. (2022). Idealism, In E. N. Zalta (Ed.), The Stanford encyclopedia of philosophy. Metaphysics Research Lab, Stanford University. https://plato.stanford.edu/archives/fall2022/entries/idealism/

Haack, S. (2002). Realisms and their rivals: Recovering our innocence. Facta Philosophica, 4, 67–88.

Haack, S. (2007). Defending science—within reason: Between scientism and cynicism. Prometheus Books.

Hartwig, M (Ed.). (2007). Dictionary of critical realism. Routledge.

Hussey, T. (2000). Realism and nursing. Nursing Philosophy, 1(2), 98–108. https://doi.org/10.1046/j.1466-769x.2000.00026.x

Isaacs, S., Ploeg, J., & Tompkins, C. (2009). How can Rorty help nursing science in the development of a philosophical "foundation"? Nursing Philosophy, 10(2), 81–90. https://doi.org/10.1111/j.1466-769X.2008.00364.x

James, W. (1907a). Pragmatism's conception of truth. The Journal of Philosophy, Psychology and Scientific Methods, 4(6), 141–155. https://doi.org/10.2307/2012189

James, W. (1907b). Pragmatism: A new name for some old ways of thinking. Longman. Retrieved from https://brocku.ca/MeadProject/James/James_1907/James_1907_toc.html

James, W. (1975). Philosophical conceptions and practical results. In Pragmatism: A new name for some old ways of thinking (pp. 257–270). Harvard University Press.

Kagan, P. N., Smith, M. C., Cowling III, W. R., & Chinn, P. L. (2010). A nursing manifesto: an emancipatory call for knowledge development, conscience, and praxis. Nursing Philosophy, 11(1), 67–84. https://doi.org/10.1111/j.1466-769X.2009.00422.x

Kaushik, V., & Walsh, C. A. (2019). Pragmatism as a research paradigm and its implications for social work research. Social Sciences, 8(9). https://doi.org/10.3390/socsci8090255

木田元 (2010). 反哲学入門 . 新潮社

Kikuchi, J. F., & Simmons, H. (1994). A pragmatic philosophy of nursing: Threat or promise. Developing a Philosophy of Nursing, 79–94.

Kikuchi, J. F., & Simmons, H. (1999). Practical nursing judgment: A moderate realist conception. Scholarly Inquiry for Nursing Practice, 13(1), 43–55.

Lipscomb, M. (2008). Mixed method nursing studies: A critical realist critique. Nursing Philosophy, 9(1), 32–45. Retrieved from http://search.ebscohost.com/login.aspx?direct=true&db=ccm&AN=105750200&lala=ja&site=ehost-live

Liu, Y. H. (2006). Moderate realism as an approach to integrated knowledge for practice. In C. Roy (Ed.), Nursing knowledge development and clinical practice (pp. 191–199). Springer Publishing Company.

Maxwell, J. A., & Mittapalli, K. (2010). Realism as a stance for mixed methods research. In A. Tashakkori & C. Teddlie (Eds.), SAGE handbook of mixed methods in social & behavioral research (2nd Edition, pp. 145–167). Sage Publications.

McCready, J. S. (2010). Jamesian pragmatism: A framework for working towards unified diversity in nursing knowledge development. Nursing Philosophy, 11(3), 191–203. https://doi.org/10.1111/j.1466-769X.2010.00444.x

McEvoy, P., & Richards, D. (2003). Critical realism: A way forward for evaluation research in nursing? Journal of Advanced Nursing, 43(4), 411–420. https://doi.org/10.1046/j.1365-2648.2003.02730.x

Mingers, J. (2012). Abduction: The missing link between deduction and induction. A comment on Ormerod's rational inference: Deductive, inductive and probabilistic thinking. Journal of The Operational Research Society, 63(3), 860–861. https://doi.org/10.1057/jors.2011.85

Mirza, N. A., Akhtar-Danesh, N., Noesgaard, C., Martin, L., & Staples, E. (2012). A concept analysis of abductive reasoning. Journal of Advanced Nursing, 68(1), 1980–1994. https://doi.org/10.1111/jan.12379

Misak, C. (2013). The American pragmatists (The Oxford history of philosophy). Oxford University Press.

Morgan, D. (2007). Paradigms lost and pragmatism regained: Methodological implications of combining qualitative and quantitative methods. Journal of Mixed Methods Research, 1, 48–76. https://doi.org/10.1177/2345678906292462

Nairn, S. (2019). Research paradigms and the politics of nursing knowledge: A reflective discussion. Nursing Philosophy, 20(4). https://doi.org/10.1111/nup.12260

Paley, J. (2005). Error and objectivity: Cognitive illusions and qualitative research. Nursing Philosophy : An International Journal for Healthcare Professionals, 6(3), 196–209. https://doi.org/10.1111/j.1466-769X.2005.00217.x

Peirce, C. S. (n.d.). The collected papers of Charles Sanders Peirce. C. Hartshorne, P. Weiss, & A. W. Burks (Eds). Harvard University Press.

Porter, S. (2001). Nightingale's realist philosophy of science. Nursing Philosophy, 2(1), 14–25. https://doi.org/10.1046/j.1466-769x.2001.00029.x

Quine, W. V. O. (1951). Two Dogmas of Empiricism. Philosophical Review, 60(1), 20–43.

Reiss, J., & Sprenger, J. (2017). Scientific objectivity. Retrieved from https://plato.stanford.edu/archives/win2017/entries/scientific-objectivity/

Risjord, M. (2010). Nursing knowledge: Science, practice and philosophy. Wiley-Blackwell.

Rorty, R. (1979). Philosophy and the mirror of nature. Princeton University Press.

Rorty, R. (1982). Consequences of pragmatism. University of Minnesota Press.

Rorty, R. (1991). Objectivity, relativism, and truth: Philosophical papers, volume 1. Cambridge University Press.

Theodoridis, K. (2018). Nursing as concrete philosophy, Part I: Risjord on nursing knowledge. Nursing Philosophy, 19(2), e12205. https://doi.org/10.1111/nup.12205

Wainwright, S. P. (1997). A new paradigm for nursing: The potential of realism. Journal of Advanced Nursing, 26(6), 1262–1271. https://doi.org/10.1046/j.1365-2648.1997.00429.x

Warms, C. A., & Schroeder, C. A. (1999). Bridging the gulf between science and action: The "new fuzzies" of neopragmatism. Advances in Nursing Science, 22(2). https://doi.org/10.1097/00012272-199912000-00002

Wright, C. (1994). Truth and objectivity. Harvard University Press.

Younas, A. (2020). Operationalist and inferentialist pragmatism: Implications for nursing knowledge development and practice. Nursing Philosophy, 21(4), e12323. https://doi.org/https://doi.org/10.1111/nup.12323